

グレン権藤氏を偲ぶ会

8月5日(月)、ミッドタウンのLam Bo Ballroomにて、7月1日に亡くなられたグレン権藤氏を偲ぶ会が開催された。権藤氏は、HEB内の「Sushiya」のオーナーであり、1980年以来ヒューストン日本商工会に準会員として在籍されていた。ご両親のはじめたヒューストン初の日本食レストラン「Tokyo Garden」を継いで、United航空の機内食を提供するなど、日本食普及に尽力されたヒューストン日系人の顔であった。

約400名が集まった会場は、長沼総領事をはじめAI Green連邦下院議員、Gene Wu州下院議員、Whitmireヒューストン市長などの公職の方々、GHPやヒューストン日本商工会の他、台湾、フィリピンなどのアジア系の商工会の代表者、ヒューストン日米協会やアジア協会などの文化団体の代表者など、老若男女問わず多くの方々に埋め尽くされ、権藤氏の生前の交友の広さを物語っていた。

権藤氏と特に親しかったDonna Cole氏の司会で式が進行し、挨拶に登壇した誰もが、それぞれのかかわりの中で感じてきた権藤氏の人となりや「温かく寛大な人柄であった」と異口同音に評し、権藤との別れを惜しんだ。最後に挨拶に立った一人息子のRobert氏は、「皆さんが楽しんでいるのを見るのが大好きだった父は、このように集まってくださった皆さんを空の上から嬉しそうに見ていることでしょう。」と述べ、レセプションは、出席者が権藤氏との楽しい思い出を互いに語りあう等、旧交を温めながら権藤氏による引き合わせに感謝する場となった。



▲お別れ会に出席されたご息子のロバートさん(右)と、長沼総領事(左)

ヒューストンの歴史に残る偉大な日系人、グレン権藤氏を悼んで

「ハイ」とニコニコしながら、総領事館のレセプションにかなり遅れてやってきた小柄なおじいちゃん。オールバックのロマンスグレーに、よく手入れされた口ひげがダンディーでエネルギーに満ち溢れている。ん、日本人? 「お名前は?」と日本語で問いかけると、「ゴンドー、ゴンドー。Oh, you are a new staff, ha?」と言いながら、握手をしてきた。小さい体からは想像していなかったほどの力強さに驚いた顔の私を見て、いたずらっぽく顔をくしゃくしゃにして笑った。

それがグレン権藤さんと私の最初の出会いだ。出欠の連絡をしないけど、いつも来てくれるよ。」とベテラン職員があとで教えてくれたその言葉通り、その後のレセプションで、当日まで出欠不明のまま毎回権藤さんにお会いした。私の顔を見るたびに、「仕事には慣れた?」「元気にしてたかい?」と、力強い握手をしながら温かい言葉をかけてくださった。それから何度目か後のレセプションで、「ご出席いただけるときは教えてください。」と思いついて言うと、少し驚いたような顔で私を見てから「I'm a very busy person.」とからかうようにはぐらかされた。自分に向かってよくそんなことを言うな、と思われたのかも。しかし、それからは出席の返信をしてくださるようになった。

初めてお会いしてから4年ほど経って、広報文化班で企画した「弁当コンテスト」の審査員をお願いした。HEBのSushiyaを展開している権藤さん以上に審査員にふさわしい人はいるまいと思ひ、そして私は更に図々しくも、コンテストで使うための炊飯器を貸してもらえないか、と頼んだ。イベントでは、来場者全員でおむすびを作ることにしたので、お米を20合ほど炊く必要があったからだ。

権藤さんは、「う〜ん…じゃあ、うちの店の人に頼んでみるよ」と言ってくださった。イベント前日、1人では抱えきれないほど大きい業務用の炊飯器がオフィスに届いた。おかげさまで、イベントでは十分なご飯を提供することができ、参加者は大満足。審査員になった権藤さんも、他の審査員とあーだ、こーだと言いながらお弁当の審査を楽しんでいた。その三日後、同じ大きさの新品の炊飯器がオフィスに届いた。驚いて権藤さんに電話をかけると、「私からのプレゼントだよ。次の弁当コンテストで使って。」



▲2013年2月23日: お弁当審査中。左からHEBマネージャー、権藤氏、HEBスタッフ、サタケの直木社長(当時)

それから何度もいろいろなイベントやレセプションでお会いする機会が増え、私のお願いも増えていった。そのうち電話をすると、クスクス笑いながら開口一番「What's your request this time?」と言われるようになるほどになった。そしていつも「Ok, Ok」と二つ返事で引き受けてくださるのだ。何と太っ腹な!

…とはいえ「太っ腹」は心だけで、権藤さんはスリムな方である。ジャパンフェスティバルに行ったとき、細身のジーンズをはきこなしてさっそうと歩いている人がいた。子どもかと思ったら頭は白いので、「え?」と思って顔を見たら権藤さんだった。私を見て、「来てくれたの? ありがとう。」と言われたので、「本当の日本のお祭りみたいですね。」と答えたら、「僕が始めたんだよ。」と嬉しそうにニコニコした。それまでスーツ姿しか見たことがなかったが、あんなにジーンズの似合う60代の男性を初めて見た。好奇心にあふれ、皆に楽しんでほしいというサービス精神が、体つきまで少年のように瑞々しくさせたのだろうか? ジャパンフェスティバルでは、子供の成長を見守る親のように会場を何度も回って、出店者や来場者に声をかけたり、かけられたりしていた。「権藤さんが来ると雨が降らない」というジンクスもあったほどだ。ご本人自身が太陽のようであったが、あの笑顔が晴れを呼びこんでいたに違いない。これからは、空の上からジャパンフェスティバルを見守ってくださるだろう。

2021年のコロナの間、ガルフストリームの「ヒューストンの日系人」シリーズの第二弾として、権藤さんにインタビューをさせていただいた。1時間くらい予定だったのに、結局3時間になった。テキサスの高校の歴史教科書に、第二次大戦時の日系人強制収容所の記述を記載するように働きかけた話には、日系人としての誇りがにじんだ。愛妻のKathyさんが隣に座り、波乱万丈の人生を楽しそうに振り返る権藤さんは、将来への確かなプランをもち、冷静に前向きに進んでいくことで苦労や試練を乗り越えてきたように見えた。

アメリカ人として培った人種を超えた博愛で、どんな人とも分け隔てなく仲良くなり、どんな人からも尊敬されていた権藤さんだが、そのルーツから「日本を愛する気持ち」は特に大きかった。あの小柄な体に宿った心は、四次元ポケットのように広く深く果てしなかった。これからもまだまだ元気でご活躍いただきたいかったのに…。仕事に情熱を持ち、出会った人々に温かい笑顔と固い握手の記憶を残したヒューストンの歴史に刻まれるべき偉大な日系人に、心から感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(編集委員 佐藤暁子)



▲2024年3月24日: Envisioning the Future: The National Museum of Asian Pacific American History and Culture (Asia Society)でKathy夫人と。